

国史研究のむつかしいところである。

総合討論 日本史学専修 大日方純夫

討論の冒頭、両報告者がコメントを受けて発言した。まず、松園氏は今井氏のコメントに即して発言し、いずれもその通りだと述べた。とくに一九九〇年代、『早稲田文学』が坪内逍遙らを中心に、文学だけでなく、広く史学界の動向を紹介していた点に言及し、類似のことは浮田和民についても言えると指摘した。そして、浮田は一方で政治学の講義や本を残すとともに、他方で純然たる西洋史研究も残しており、その学問的スタンスはシーリとよく似ているとした。また、今井登志喜の回想についても非常に面白く聞いたとして、彼がイルラント問題を朝鮮とパラレルに見ていたのとは間違いないと述べた。最後に、現在のイギリスにおける歴史意識にもふれ、帝国史という概念は現在もある、イギリス人にはいまだに帝国主義的な支配に対する反省の念

はない、と指摘した。

李氏は、まず、両コメントに共通するトーンに答えるかたちで、黑板は非常に魅力的な人で、多方面に力を発揮しており、断罪するつもりで向きあっているわけではない、エスペラントの日本代表にもなっており、それほど単純な人ではない、と述べた。つづいて今井氏のコメントに対して、一九六〇年代とのかかわりにふれ、あの時代に思いをはせるのは、今の歴史学が言葉の力を失っていると感じるからだ、石母田正・西嶋定生といった人のものを読むと、言葉の重み、現実とどう向き合うのかという思考の経路があるとした。ただし、今から見ると、彼らも結果として国民国家を強化していたのではないかと述べた。その上で、二〇世紀末の歴史学は、一九世紀末、二〇世紀初めの歴史学をどう越えていくかを考えなければ何の意味もないと指摘した。さらにアジア全体のなかでのバランスを欠いているのではないかと岡内氏の指摘に対しては、確かにその通りだが、朝

鮮の特殊性にこだわりたい、それが現代の朝鮮を規定しているからだ、と答えた。

つづいてフロアーからの発言にうつり、まず、西洋史の前田徹氏が、歴史学の理屈なり研究は現実の後追いをしている説明原理だという気もしないではないとして、ドイツとポーランドの対話にしても、現実がもたらしたものではないかと指摘した。また、ポストモダンで考えるよりも、現実に即し、東アジアの政治的な安定を前提にして、大学で歴史をやっている人たちが対話する場ができれば、案外早く話が進むのではないかと述べた。

考古学の近藤二郎氏は、イギリスを模倣して朝鮮の植民地支配、調査研究が行われたという点にふれ、黑板がエジプトに行った頃、エジプトのものをイギリスに持ち帰ることの是非をめぐって議論があり、そうした状況を見ながら黑板は朝鮮の史跡や博物館のあり方を考えていたのではないかと指摘した。また、歴史教育を植民地どのような展開していったかは、非常に大きな

問題だとして、現在に至ってもエジプトの考古学は欧米の枠を出ていないが、現在、韓国の側ではかつての日本の調査をどう評価しているのか、と問題提起した。

東洋史の近藤一成氏は、報告・討論を聞いて、今の歴史家はタフでなければいけないとの印象を強くしたとして、今でもそれは有効だという見解をどこまで批判できるのか、それを否定すると歴史学としてのデイスプリングがなくなってしまうのではないかと述べた。また、世代差の問題にもふれ、五〇代の研究者になると、それ以上の世代に比して文献の後ろにあるリアリティが消えてしまい、非常に華麗な議論は展開するものの、史料の読みが決定的に違ってしまうとした。そのうえで、しかし、追体験はできないのだから、その時々にかかわれない現実にかかわっていったらよいのだろうかとの問題提起した。

日本史の新川登亀男氏は、報告・発言を聞いてショックを受けたとして、次のように述べた。シンポジウムの本当のテーマ

は、近代歴史学の自己点検だと受け止めた。したがって大変に重い。近代歴史学は一〇〇年以上の間、自己検証をしてこなかった。体力がどこまであるかわからないが、やらないわけにはいかない。しかし、全部はできない。それぞれの立場からするしかない。新川氏はこう述べ、つづいて『史観』創刊の辞を浮田が書いていることを紹介した。

来日中の韓国の近代史研究者、金祥起氏は、とくに「朝鮮史」編纂の問題にふれて、八〇年代までは「朝鮮史」の史観をどう批判するかということで韓国では研究をしてきたが、九〇年代以降はこのような「植民主義史観」に対してとくには関心がなくなった。「朝鮮史」のような考え方はすでに批判され、韓国的な新しい歴史ができていると考えられる、と指摘した。

日本史の深谷克己氏は、小倉氏の趣旨説明からは歴史学の非政治性、学の独自性といった印象を受けたにもかかわらず、二報告ではむしろ歴史学と政治との接近が指摘

された点、および、前近代にも歴史の学問、考証の方法とか、歴史の編纂の仕方というものがあつたはずだという点をあげて、とすれば、そもそも近代歴史学とは何だったのか、小倉氏に聞きたいと発言した。

以上をもって討論を打ち切り、松園・李両氏がまとめの発言をおこなった後、小倉氏が深谷氏の質問にも答えつつ、次のようにむすびの言葉を述べた。

ランケに先立つ古代ローマ史家のニープールは、神話的なローマ史を科学的なローマ史にするため、史料を立論の根拠にしやうとした。その方法をランケも踏襲している。ロマン主義の風潮の中で、歴史学は文学や哲学から自立するために、立論を実証的に組み立てることに重点をおいた。その上に立って、諸国家間の関係の歴史を組み立てようとした。それが客観的かどうかは当時は余り重要ではなかった。客観性が問題にされるのは、マックス・ヴェバーに至ってである。史料に立脚し、しかも、第一

次史料を重視することが近代歴史学の方法上の独自性であり、このことと立論の客観性とは次元の違う問題である。

歴史は人気がないという発言もあったが、他方では現在、テレビで歴史は大変に人気がある。その時に出てくるのは、コンピュータ・グラフィックスを使ったビジュアル・リアリティの問題である。そういったものはやっているからこそ、そこにどのような根拠や裏づけがあるのかという点で、ランケを読み返す意味がある。近代歴史学の根拠として、そこをもう一度見る必要がある。また、言葉の力云々という議論もあったが、ランケも、その弟子のリースも、ともに叙述を非常に重視している。小倉氏は以上のように述べたうえで、四專修の対話の有効性が明らかになったことを強調しつつ、シンポジウムを結んだ。